

“おネエ”のキャラクターの人称

ーバラエティ番組とフィクション作品を材料にー

お茶の水女子大学 大学院生

河野 礼実

「おネエ」とは、「生物学的には男性だが（あるいは男性であったが）、装い、しぐさ、言葉遣いなどで女性ジェンダーの特徴を有する人」のことを言う。彼/彼女たちが使用する（と考えられている）言葉は、一般的に「おネエことば」と呼ばれる。この「おネエことば」について、中村（2010）はジェンダー規範を利用しつつも、その規範を越境する創造的な言語行為であると述べている。このような創造的言語行為に関する研究は、日本語とジェンダーの結びつきを改めて明らかにすることにつながり、日本語とジェンダーの研究分野において大きな意義があると考えられる。しかし、これまで行われてきた研究の多くは、印象レベル、あるいは少数の話者の限られた例を材料にした分析に留まっている。そこで、発表者は「おネエ」のキャラクターたちが実際にどのような言語資源を用いているのか、複数のデータをもとに実証的な分析を行った。本発表は中でも人称について扱う。データは以下の2種である。

<データ①> 対象 「おネエ」タレントと呼ばれる人物

材料 テレビのバラエティ番組

<データ②> 対象 フィクション作品に登場する「おネエ」キャラクタの登場人物

材料 映画、テレビドラマ、小説、マンガ

日本語の人称は英語のように固定的ではなく、話し手の属性や会話の相手・場によって異なるものである。話し手の属性には年齢・性別・職業・階層などが含まれるが、人称は中でも性別による使い分けが明確に区別されている。

自称は、特にその傾向が強い。「あたし」「あたし」は女性専用形式、「ぼく」「おれ」は男性専用形式であるとされている。「おネエことば」に関しては、先行研究では女性専用形式である「あたし」が代表的な自称として挙げられている。確かに<データ②>では「あたし」の使用者が最も多かった。<データ②>の対象者が使用する自称は、主に「あたし」と「わたし」であり、男性が使用するとされる「おれ」「ぼく」は選ばれないということがデータから明らかになった。一方、<データ①>では、「あたし」「わたし」以外にも「ぼく」「わたくし」「自分の名前」の使用が見られ、<データ②>に比べるとバラエティに富んでいた。また、いずれのデータにおいても「自称のシフト現象」が見られた。

次に、対称については2種のデータ間で使用者数に大きな違いが見られた。<データ①>では対象者の半数にしか対称の使用は観察されなかったが、<データ②>では対象者全員が対称を使用していた。「対称を使用する」という言語行動が、「おネエ」のキャラクター演出にどのように結びついているのだろうか。

本発表では、2種のデータを用い、「おネエ」のキャラクターがどのような人称を使用しているのか明らかにし、その結果から「おネエ」のキャラクターの演出に言語がどのようにかかわっているか、ジェンダーを表現する言語資源がどのように利用されているのかを考察を行う。